備陽史探訪
第75号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL.(0849) 53-6157

毛利元就と備後

会長　田口　義之

待望のドラマが始まった。もちろん、ＮＨＫの大河ドラマ「毛利元就」である。歴史好きの皆さんのことだから、毎週固唾を呑んでテレビの前に座っておられることであろう。

このドラマの焦点は、言うまでも無く、今まで画面に登場することの少なかった元就や、尼子経久・大内義興・義隆といった中国地方の武将たちの生き様がいかに描かれるかにあるのだが、それにも増して私達備後人の気になることは、身近な地名や武将が何時、どのような形で紹介されるかであろう。

歴史を紐解いて見ると、毛利氏と備後の関係は、鎌倉時代にさかのぼることがわかる。鎌倉中期以降、備後の守護を勤めた長井氏は、毛利氏の同族で、その本家【惣領家】にあたるのである。毛利氏は、大江広元の四男季光が相模国毛利荘を本拠にしたことに始まるが、広元の家督は次男の時広が相続し、出羽国長井荘【下野或いは武蔵の長井とも言う】を名字の地として「長井」氏を称した。備後守護を勤めた長井氏はその有力な庶家である。また、その一族は備後の各地に土着し国人に成長するが、その内の一家、信敷荘【庄原市】を本拠とした長井氏は、南北朝時代の後期に毛利氏から養子を迎え吉田荘内福原村を譲られ、「福原」氏を称した。これが元就の母の実家福原氏である。福原長井氏は長和荘【福山市瀬戸町】の地頭職を持っていたから、直接の関係はないにしても、間接的には、福山も毛利氏と大いに関係があることになる。

安芸毛利氏の歴史は、南北朝時代の始め、季光の孫にあたる時親が一族を引き連れて吉田荘に土着したことに始まり、備後との関わりもその直後に始まっている。貞治二年【１３６３】、足利幕府に敵対した足利直冬は大軍を率いて備後宮内【芦品郡新市町】に陣し、宮入道道仙の拠る宮城を攻めたが、この直冬の陣中に時親の孫毛利備中守親衡もいたのである。合戦は宮氏の勝利に終り、「太平記」巻三八によると、この時親衡が真っ先に逃亡したとして、

「楢の葉の、ゆるきの森に、いる鷺は、深山風（みやまおろし）に、音おや鳴らん」

という落首が路傍に立てられたという。

この毛利氏の勢力が直接備後及ぶのは、元就の祖父豊元の代である。豊元は、「応仁の乱」に際して、初めは東軍に属していたが、途中で西軍方に寝返り、東軍方の備後守護、山名是豊追放作戦では大きな役割を果たした。その恩賞として備後守護山名政豊から与えられたのが「備後三千貫」と呼ばれた所領である。備後三千貫は、現在の世羅郡西部にあたり、元就登場以前、すでに毛利氏は備後に橋頭堡を確保していたのである。

また、元就の兄興元も、意欲的に備後の政情に関わりを持っていた。永正九年【１５１２】九月、大内氏の命を受けた興元は備後に出兵し、尼子方の古志氏を攻撃し、一時はその居城、松永本郷の大場山城の切り崩しに成功している。この時は古志氏の反撃が功を奏し、興元は兵を引いたが、その直後には、備後の有力国人山内氏と木梨氏の争いに介入し小早川氏と共に、両氏に兵を引かせることに成功している。

元就の備後制圧は、こうした祖父や兄の切り開いた基盤を引き継いで行われたわけで、決して元就一人の功ではない。

例えば、元就の備後南部経略に大きな役割を果たした国人に熊野の渡辺氏がいるが、天正十九年の小早川隆景の書状【譜録渡辺三郎左衛門】によれば、熊野に一乗山城を築いた渡辺兼は、興元に招かれて「久しく吉田」に滞在し、「その節、日頼様【元就】は未だ田治比殿にて御座候つる間、兄弟の如く御取り組み候て逗留」していたと言う。元就の備後南部進出にあたっては、渡辺兼が毛利氏の為に犬馬の労を惜しまなかったことは言うまでもない。

待望のドラマの中で、こうした元就と備後の関わりがどんな形で描かれるか、期待したい。

二月二十二日の郷土史講座の会場は市民会館に変更となりました。

歴史一口話

福山藩における享保の大飢饉

出内博都

福山藩編年史料（土肥文庫）に次のような記録がある。

浦上村　吉津村
光福寺過去帳　法真寺過去帳

享保		
一五年	三五	
一六年	三一	四二
一七年	三三	四八
一八年	八四	一一九
一九年	三一	四〇
二〇年	一八	三六
二一年	三二	二七
元文		
二年	二七	
三年	二三	

これは右の二ヶ寺年間の死亡者の取扱数である。

「徳兵衛餓死イタシ候由、使者ノ申候、使者ハ手城村七介ト申ス者也弥之子分之者也。此者口上ニテ戒号遣ハシ、引導ニハ不参候。補記ノ如キハ諸処ニ記セリ、或ハ他村ノ者ノ福山城下ニ乞食ニ出デ餓死セル者多ク記載アリ、コノ年ノ死亡者取扱数一一九人」

享保一八年の死者の数は、光福寺の平均値二八・八人の二・九倍、法真寺は平均値三八・八人の三・一倍になっている。

この史料は、所謂「享保の大飢饉（享保一七年＝一七三二）」の餓死者の反映である。当時の村の人口が何人いたか、村に寺がいくらあったか、死者の全てを寺が管理したのか（勿論、寺請制度だから大部分は取扱っていただろうが）どうかもわからない、実数はどうかと言うのでなく、近世の三大飢饉の一つと言われる歴史上の史実がこんな身近な形で具体的に体験することができることは、史料あさりの楽しみの一つである。

享保の大飢饉は享保十七年（一七三二）に発生した、日本歴史大辞典（河出書房）によれば、伊勢・近江以西の西国一帯にわたり、特に西海道（九州）が最もひどく、南海（四国）・山陽・山陰がこれについだ。前年の冬気候不順で五、六月にいたるまで昼夜の別なく霖雨が続き、気温また寒冷をきわめた。そして先ず西国表の諸国に「大きさ黄金虫の如く、形、甲冑を帯したるに似」た蝗虫が群生一夜のうちに稲数万石を喰い尽くす勢いで次第に隣国に移り畿内にまで及んだ・・・とある。この虫をイナゴといったり、ウンカといったり諸書区々であるが、天候不順よりくる害虫発生による天災型の大飢饉であった。各藩から幕府に出した払下米の申請書「虫付損耗留書」によれば、物成（年貢）半減以下の諸藩は鹿児島藩を除く西海道二七藩紀伊藩を除く南海道一〇藩、山陽道四藩、山陰道四藩、機内一藩で、その合計本高四九一万石、過去五ヶ年平均収穫高一三六万石であるのに、この年の収穫高は僅かに六二万八〇〇〇石にすぎず、幕府は大阪から二一万七五二五石を被害地へ向けて発送した。なお、「徳川実記」によれば「すべて山陽・西国・四国等にて餓死するもの九十六万九千九百人とぞ聞こえし」とある。

飢餓数は幕府・旗本領合わせて六七万人と言うから、当時の中・四国・九州の人口七三三万四千三百（享保六年、国史大辞典による）の約三六パーセントにあたり、餓死者九十六万九千九百人は全人口の一三・二パーセントにあたる。全地域を平均で見るとは一三・二パーセントと実感をともなわないが、各藩や地域差によってはかなり悲惨な状態があったと思われる。この飢饉にまつわるエピソードとして、巷間に伝わるものとして①麦種を枕に餓死した義民、作兵衛という伊予藩の農民、麦種はどうしても次の生産のために残さなくてはと餓死して節を守った義民として後世からあがめられた。ちなみに伊予藩に餓死者が多かったということで、藩主松平定英は将軍から出仕を止められた藩である。②西国のお大尽、百両握ったまま空腹死、この年西国では行き倒れてそのまま餓死する者が続出したが、なかに一人の立派な男が哀れにも餓死していた。役人が調べてみると、手付かずの百両という大金を首にかけたままだった。お金があっても茶碗一杯の飯さえ入手できず、哀れな死をとげた象徴的なエピソードである。③「土之助」という奇名の由来・・西国のさる大家の女中と下男の夫婦は貧乏と飢饉のため可愛い坊やが育てられずやむなく泣きながら此の子をうめた、その主筋にあたる家の子供が、ある日遊びにふけりながら、ふとその土を掘ってみると、そこにまだ息のある赤ン坊が可愛い顔をのぞかせたのでビックリ仰天、母親にそのことを告げた、母も驚きさっそく赤チャンを掘り出した。お湯にいれ薬など与え、乳を呑ませるなどしてやっと生き返った。成長した赤ン坊は二、三才の頃、耳から土が出たことがあった。この子はすく

くと成長し、たくましい男になった。主人はこの子に「土之助」という名をつけた。この子の外にも同様に死の深淵から甦った子供の名は、それが女の子なら「蘇（そ）め」とか「甦（そ）や」と名つけられたし、男なら「飢助（きすけ）」とか、「蘇助（そすけ）」など異様でおかしな名をつけた（整政豊年記）。福山藩では享保十七年十二月幕府の御触書きをその都度伝えているが特に藩独自のものはみあたらない。御触書きの内容は「・・・凶年之手当ハ、国主・領主兼て可申付は勿論に候。然共今年の虫損亡は夥敷儀にて、地頭之精力計にては難叶相聞候、百姓、町人之内にても、身上相応に助力致、来春麦作、出来迄之内、飢をつなぎ候様に勘弁候て、いか様に成共いたし、餓死、多無之様に、心之及候程は、作略致し可申事に候・・」と国を挙げての協力を説き、しかる上で「・・多飢人等も有之候ハバ、可為越度候、面々、無油断可申付儀には候得共・・」とにらみをきかし藩を督励している、松山藩主・松平定英の出仕停止処分もこうした背景のなかで行われたものである。

福山藩では浦上村光福寺の過去帳に「・・亨保十七年壬子歳七月・・此頃うんか発生猩獗ス、各村ノ寺院ニ於イテ百萬遍ノ回向ヲシテ退散ノ祈祷ヲ行ウ・・」とあるように、領内の神社・仏閣に祈念・祈祷を命じている（福山市史）。幕府の御触書きは何回かでているが、それに応じて町人も協力した、編年史料に「小早河家古記録・弥治兵衛代」として「亨保十八年丑歳正月、御代官様より御触有之飢人施行之為、持米可差出之由被仰候ニ付正月廿三日、去亥歳之貯へ米之内、壱石、差出申候事の史料もある。この史料の（註）として「亨保十七年九月、幕府ヨリ福山藩へハ、救米買入代金、壱萬両ノ拝借金ヲ許サレタル」の記事があるが、如何なる史料に基づいたものかは不明である。

記録史料の少ない当時として生々しい実態はわからないが、前出の浦上村光福寺の過去帳の八四人という死者は当時の人口八六〇人（便宜上、福山志料による）の九・七パーセント、吉津村の場合の一一九人は当時の人口一〇一六人の一一・七パーセントである。この死亡率の高さ、ちなみに現在の福山市になおせば年間四万人に近い死者をだしたことになる、この小さな過去帳が何より雄弁にこの大飢饉の惨状を物語っていると言えよう。

中央アジアの旅紀行 9

神原　正昭

旅も終りに近付く、ウズベキスタンでは自国の貨幣ソム。日本の円は通用しない、使用はドルのみである。

午後三時ホテル出発の予定であったが運転手の昼寝で少し遅れる。待ち時間に現地の子供に折り紙を教えている女の人もいてのんびりしたものである。

十五時四十分。シトライ・マヒホーサ宮殿に着く、この宮殿は門を入ると大きな丸太が渡してある、中庭には花が多く咲いていて美しく、また白い建物であり、インド風であるという。昔、謁見の間であった部屋を見学する。部屋には王室に寄贈された宝石類・武器・衣類・刺繍品などが展示してあり、どれを見ても溜め息が出るほどの逸品ばかりである。色々と部屋を廻り、最後の部屋は焼物の部屋になっていて、ここに貴重な陶器が陳列されている。景徳鎮の等身大の壷・日本の古伊万里の優れた大皿や壷が一室にびっしり並べられ驚きである。十八～十九世紀もシルクロードは働いていたのであろうか、感動のうちに部屋を出る。

この宮殿に美女三千人を住まわせたハーレムがあって、広いプールに若い娘を多く集め、王はバルコニーのような高い建物の上から眺め、気に入った娘がいるとリンゴを投げて選んだというところである。ここの一角に土産店があり、ブハラは金細工が有名でありイスラムの娘さんの帽子を孫の土産に買う（三ドル）。

十八時、本日の見学も終りホテルに帰る。ガイドが熱心で上手だと旅も楽しいものである。

十九時四〇分より夕食。本日は地元の舞踊団の公演があるとのこと、会場はホテルの十二階、会場に観客は私たち一行と白人の男女二名であり、舞踊団の人数の方が多いようである。ここでもサマルカンドと同じように踊り手の女性はロシア人で色白の美人。伴奏八人・踊り手七人である。踊りの中に激しく旋回するところがあり、踊りに詳しい人がいうにはかつてこの地方のソグディアナで踊っていた胡旋舞の面影を見る事が出来たと言っていた。食事時間は一時間二〇分（一人二ドル）プラハ最後の夜ではあるが、それにしてもあの踊り子たちはいくらもらえるのか考えさせられる。明日のタシケントへの移動のためにトランクなどを整理する。二十三時就寝。

旅も十日目になる。朝六時、目が覚める。本日も晴天、ホテルの窓よりカリヤンミナレットがよく見える。朝は爽快。二泊したホテルブボロを八時三〇分出発。それにしても遠くまできたものだ思う。二度と来ることはないだろうこの町には、何か魅力があって離れ難い思いがする。旅も終盤で今日はブハラ空港よりタシケントに飛ぶ。ブハラに来るときは砂漠の中をバスで来たが帰りは飛行機で上空より砂漠の中の町などを見ることになる。

八時五〇分、空港に着く。田舎町の空港にしては待合室がしゃれている。身体検査・荷物検査は口を開けさせ形式的に見るだけ、飛行機には日本人を優先的に乗せてくれて、座席の前のほうに取れる。有難いことである。所によっては日本人と言うだけで厳しい取り調べをされていたが、ブハラは何か友好的で予定では飛行機はプロペラ機であったがクーラー付ジェット機になっている。タシケントまで一時間三十五分とのことで一〇時空港離陸一路タシケントに飛ぶ。下を見ると砂漠の中に道路が直線的に見える。集落も所々に見える。このような所での生活は厳しいものであろうと思う。

この時機体が大きく揺れる。気流が悪いのか砂嵐かそのどちらかであろう。旅も長くすると慣れてこれくらいのことでは驚かなくなるものである。しばらくして機内放送でタシケントの気温など放送と同時に飛行機は降下し始める。タシケント空港はこのあたりのハブ空港なので広大でここで手違いが起こる。荷物を受け取るためその場所に移動するが荷物が来ない。荷物は次の便に乗せているとのことでバスを待つこと一時間クーラーが無いので暑い。中東での旅はちぐはぐなことが多い。そのうち荷物が来る。早速バスに積んでタシケント二度目のホテルに着く。直ちに食堂で昼食。昼食後団長より午後の見学場所の説明を受け、この時現地ガイドのモーアマリカさんと再開する。

団長の発案により、午後からの見学場所に行く前に日本人墓地に参拝する。墓地は広く回教寺院やブドウ棚のほとりを通り、奥まったところにあり、現地語でヤポンメザルと言う。この墓地には一人一人の個人墓とそれとは別に御影石の象徴的な墓碑が建っている。墓碑の裏面に七九名の名前が県別に彫りこんでいる。広島県人は七名だった。次の七名である。

故　土井満洲男　　加藤　信一
正畑　　尊　　根本　春雄
榊原　敏彦　　平内　真治
比原　頼之の諸氏である。

この墓碑に日本より持参した水・酒・たばこ・花など供えて全員で拝礼する。終戦後ソ連邦に捕虜になり、この地に送られ過酷な強制重労働に従事し身体をこわし、愛しい肉親が待つ故郷の地を踏まずして遠く離れた異郷のこの地で心ならずも他界された人々の冥福を心からお祈りした。この墓地を永く守ってくれている現地人ミローキルさんに会って今後の墓の清掃などお願いし、また、幾ばくかのお金を出し合って差し上げた。

参拝も終って、またタシケント市内に戻る日本人抑留者が造った演劇広場に行きこの広場にナヴオイ劇場があり、これが素晴しい劇場で戦後タシケント市に抑留されていた日本人捕虜が強制労働によって造られたもの、どういう思いで造ったのであろうか、素晴しい建物である。日本人の技術水準の高さを誇っているようで捕虜であっても故国の事を考え誇りを持ってこの建設に従事したのであろう。劇場は大理石で造られ一五〇〇席の大ホールがあるというが、私達が行った日が丁度休日で中に入って見ることは出来なかった。

劇場の前は広場になっていてその広場の中央には大きな噴水のある池があり、多くの市民が休息しているここも捕虜の方が造ったところである。今日の平和もこの人達の犠牲があるからこそ成り立っているようで頭の下がる思いがする。

十五時四〇分、ウズベク民芸博物館に行く。この博物館は元トルコ大使館で今は地元の伝統民芸の博物館になっている。伝統のカーペット・刺繍品・布地などを展示している。シルクロード特有の矢がすり模様の原色に近い布地はアクラスという日本の矢がすりのルーツかと思ったがそうではなく雲が川に写っている状態を表現したものだという。長い伝説に支えられた品々にただ感嘆するのみである。

ここで現地のガイド、マリカさんから苦情が出る。私達が真剣に説明を聴かないからだ。私達も暑さと疲れで足もガタガタでメモをするのが精一杯、そして、この館にもクーラーはない。

十六時四〇分、民芸館を出てホテルに帰る。今夜で中東最後の夕食となり、モスコーから来てくれている通訳のオリガさんともお別れの夕食

であるので食事はパーティ形式になる。シャンペン・ビール・ウォッカを飲みながらオリガさんを囲んで今回の旅のこと、ロシアの習慣など話に弾みが付く。

本日を持って中東の旅も終り明日は朝が早く五時に起床のため、朝食は弁当になる。

内容

キウリ・リンゴ・トマト丸ごとナン二枚・チーズ一ケ

ソーダー水一本

以上をナイロン袋に入れてあるいたって簡素である。各自朝食の弁当を持って部屋に帰る。中東最後の夜ホテル・ウズベクスタンにも二泊したことになる。今日参拝した日本人墓地のことが色々と思い出される。明日、北京に一泊のみとなる。

終りにあたり、私は一度は行って見たかったシルクロード、それも思ってもいなかった天山北路を飛んで中央アジアのシルクロードの要衝を色々と見ることが出来た。

昔のキャラバンの苦労を知るため砂漠の中を五〇〇kmのバスの旅を体験して少しはその過酷さが分かり、中東地域のことがほんの少しは分かったような気がする。それにしてもサマルカンドやブハラには中世の夢のある建物が多くあり、またその雰囲気がそのまま残っている。今までどこの街角からキャラバンが出てきても不思議ではないような気がする。世界遺産としていつまでも大切にしておきたいものである。

中東の旅の十二日間は最初は長いと思ったが、終ってみると短いものであっというまに終ったような気がする。皆様もぜひ一度行かれてみてはいかがでしょうか。ヨーロッパ・中国とまた違った中東独特の文化があるように思います。　おわり。

歴民研からのお知らせ

歴民研では「歴民研もフィールドへ出よう」を合言葉に、毎月第二・第四日曜日に福山市加茂町周辺の石像物調査を行っています。既に昨年十二月一日、十五日に二回の調査を実施しており、今年も引き続いて調査を行います。皆さん、振るってご参加下さい。次回以降の調査日程は

二月二十三日　（日）

三月　九　日　（日）

・集合時間　午前十時

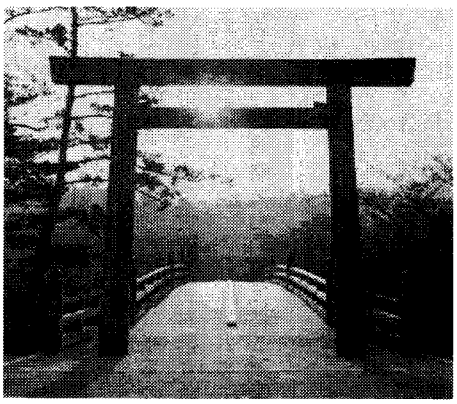
・集合場所　賀茂神社

（福山市賀茂町芦原）

伊勢神宮（内宮）ご鎮座　二千年

柿本　光明

昨年の六月、三重県伊勢市の商工会議所水谷会頭（元陸軍航空通信部隊の戦友）からの招待で、近鉄宇治山田駅に降り立つと、伊勢市・鳥羽市・二見町・御園町・明和町が一体となり「伊勢神宮内宮で鎮座二千年奉祝記念」で、日本の歴史と文化、そして現在を伊勢との関わりの中で明らかにするため、いろいろな催しを一月から十二月末まで一大イベントとして多彩な行事の計画をされていた。



伊勢神宮（内宮）が垂仁天皇の二十六年丁巳にこの地に鎮座された年より数えて、平成八年は二千年目にあたりご鎮座の年はわが国紀元六五七年で西暦では紀元前四年にあたるちなみに今年は紀元二六五七年で、西暦では一九九七年となる。

わが国の始まりを記しました「日本書記」には、内宮（伊勢神宮）のご祭神「天照大御神」は日本の御祖として歴代天皇のおそば近く、皇居の中でお祭されてきましたが、国内に疫病が流行るなど、それまでのお祭りの仕方では民心の乱れが治まらなくなり、第十代崇神天皇六年に、大和の笠縫邑に遷し祭られた。笠縫邑とは、今の奈良県桜井市の大神神社の近くに「神籬（ひもろぎ）」という、榊で周囲を囲うような臨時祭場を設けて皇女豊鍬入姫命がお仕えになられたと伝えられている。次の第十一代垂仁天皇の御代にいたり、皇女倭姫命は天照大御神をお祭りするのに最もふさわしい大宮地を求めて伊賀国、近江国、美濃国、伊勢国の各地を巡幸され、垂仁天皇六年（西暦紀元前四年）に五十鈴川上の現地を永遠の鎮座地と定められた。以来、平成八年でご鎮座二千年となる。

古文書によれば倭姫命がこの五十鈴川上に到着されたとき、大御神はつぎのとおり申し教えられたという。

この神風の伊勢国は、
常世の波の重波帰する国なり。
傍国の可怜し国なり。
この国に居らむと思う。

霊妙な風の吹き通う地、母なる理想郷、常世からの波が幾重にも寄せては返す、海辺の豊穣の地に、大御神はいついつまでもお鎮まりになったという。

大御神のご神体（八咫鏡）を奉じて、大伴や中臣の部族とともにこの地に神宮の基礎を定められ、神嘗祭をはじめ年中のお祭りを定め、お祭に必要な米や塩、野菜や魚介類を生産採取するための神田や諸施設、神領をも定められたという。また、禰宜や大物忌以下の奉仕者の制度や心身を清める「祓え」の法も示された。

数々のお祭りが行われるためには米を作ることから塩、野菜、果物、さらに土器までを自給しなければならない。巡幸中お留りになられた地の多くは、鈴鹿山系を水源とする米作りの先進地域である。倭姫命は〝水と米の祭〟を幾度も行われたことであろう。従って、気候の安定した地味豊かな地が求められたことであろう。また、お供えする飯や餅、魚介類などすべて清らかな火と水で調理されるので、近くにはきれいな水が流れ、深い山々がひかえていなければならない。そのようなお祭りに最適地はこの五十鈴川の川上の地であり、うしろには、神路、島路の山々が量りしれない水を貯えて新緑をたたえている。

現在、自衛隊の明野飛行場や元陸軍航空通信部隊の近くに斎宮の森があった三重県多気郡明和町の斎宮歴史博物館と伊勢神宮内宮を結ぶ旧参宮街道約一九キロをおかげ参り気分で歩く「おかげ参り伊勢まで歩講（あるこう）」が私が訪ねた翌日行われ、県内外より約二千名が参加した。

江戸時代に「おかげ参り」といって、一般民衆が群がって伊勢神宮にお参りしたことや、かって、天皇に代わり伊勢神宮に仕えた斎王（いつきのみこ）が七世紀後半から南北朝時代の激動期（十四世紀半ば）に廃絶するまで、七十四人の斎王が立てられたが、その多くは内親王が任ぜられたので、斎宮は、斎内親王ともいわれた。

この明和町から伊勢神宮に向う際に斎王が通つた道を歩く「おかげ参り」を再現した。午前十時に斎宮歴史博物館前を出発。のぼりを先頭に歴史の道・斎王宮跡を通り、旧参宮街道を外宮や神宮美術館前・倭姫命・古市街道おはらい町と歩き午後二時三十分内宮宇治橋前に到着し完歩証を受け取った。

伊勢には内宮と外宮とがあり、内宮は皇祖神である天照大御神がお祭りされ、三種の神器のひとつ、八咫鏡がご神体である。外宮には産業の守護神である豊受大御神がお祭りされ、内宮より四百八十一年遅れて、第二十一代雄略天皇の御代にご鎮座された。

神宮には、内宮外宮の両正宮と十四の別宮を二十年に一度造り替え、神座を遷す「式年遷宮」という大祭典があり千三百年余の歳月にわたり脈々と継承されてきた世界にも例のない一大伝統祭典で、平成五年十月「第六十一回神宮式年遷宮」が執り行われた。

かって「をみな」と呼ばれた日本の女性の優しさ、つつましさ、そしてたくましさの源ともいえる倭姫命に想いを馳せ、また天皇に代わって約七百年もの間、神に仕えた七四代にわたる斎王を偲び、長い歴史のなかで女性が果してきた偉業に焦点をあて、次代の日本の女性の在り方を探る、女性の発案、企画、運営による女性の祭、それが「をみなの祭」である。十月十九日土宵祭から二十日の二日間、地元出身の楠田枝里子さんを名誉実行委員長に迎え、約七百年にわたり天皇に代わって神に仕えした斎王を偲び、都から斎宮への煌びやかな群行を「絵巻」風に再現するその斎王役にアトランタオリンピックで見事銀メダルに輝いた柔ちゃんこと田村亮子さんが選ばれていたが、この行事は丁度、私の発病した日であり見物出来なかったが残念でならない。

平成八年は、お伊勢さんご鎮座二千年の年である。この二千年を記念する奉祝事業の趣意は、日本文化と歴史、そして現在を伊勢との関わりの中で明らかにした。

二千年という時の流れの中に、私は伊勢に招待され五十余年前の陸軍航空通信兵として、この斎宮の地で過ごした当時のことはなつかしく、田畑は都市化されているも斎宮の森は昔のままに緑なしている。私は伊勢は第二の故里であり、日本の歴史あらゆる文化の源となる全てがここにあるように思える。

先人が歩んできた道を辿り、原点に還ることは大切なことではないだろうか。二千年の永きにわたって培つてきた、日本人の奥深い思考。先人の育んできた民族の文化や営み。そして心を識ることは混迷をつづける現代社会のなかで未来のあるべき姿を提示してくれるものだと思う。

まほろばの旅

岡本　貞子

倭は　国のまほろば　たたなづく
青垣山隠れる　倭しうるわし

武勇の誉高き日本武尊が悲運の死の床で絶唱した大和、古代国家成立の謎とロマンをかき立てるヤマト、そんな山の辺の道を探ねたくて総勢七名、年の瀬も迫る某日、あわただしく一泊の旅に出た。

天理駅へ着いたのが午前十時過ぎタクシーで石上神社へ、布都御魂大神と額を掲げた大きな鳥居を潜ると神域には杉の大樹の底を朝霧が立ちこめ、神の使いの鶏が放し飼いにされて、トキの声が谺している。鏡池の脇から通ずる「東海自然遊歩道」の案内板に導かれていよいよ山の辺の道へ。道幅は広くなく昔のままを大切に遺されたものであろう、よく整備されていて歩き易い。ここに住む人達の愛情を肌で感じる。

やがて永久寺跡へ、再び山道を行き峠の茶屋で一休み、時計が十一時半を指し、人気のない茶屋を裏手に廻って、やっと店を開けてもらった醤油でつけ焼した粟餅と一杯のビール。干からびた喉に絶品ののどごし、一同歓声を挙げる。やがて夜都岐神社、竹之内環濠集落、少し小高いところに家が集まっている。塀を高く巡らした大きな邸が多く、その廻りに、柿、みかん、いちご畑が続く。

次は、萱生環濠集落、更に山の辺の道を行くと前方後円墳の継体天皇の皇后、手白香皇女、衾田陵がある美しく管理された森閑とした域であつた。

かなり歩いて最古の玉眼仏のある長岳寺到着、平安時代に建てられた鐘楼門の質素な美しさを見上げる。池には紅葉の楓、もみぢがたゆたいさながら一幅の絵である。

更に山の辺の道を南へ。堀に囲まれた大きな崇神天皇陵が現われる。前方後円墳で堀には水鳥が泳ぎ森の緑が静寂であった。すぐ隣りに双方中円墳の櫛山古墳があり、山の辺の道の遺跡の豊かさを楽しむ。

やがて夕ぐれどき、山の辺の旅装を解くべく、やなぎもとの樫木屋へ向かう、五時半到着、それにしてもなかなか湯茶が出ない。垣間見るとご亭主一人で奮戦していらっしゃるやつと出されたお湯呑みは七人皆異種別型、一同小さな肝を潰す。待望のメインは鍋物、豪快に大皿に山盛りで現われる。お刺身の肉厚のモンゴイカが空腹に快くとび込む。

ちょつと息を入れたところで、「われわれは、何のお手伝いもできませんが、ご主人も一緒に呑みましょう」と勧めると、冷や酒を手に、ニコニコと車座の中へ。近辺の歴史や、身近なロマンスなど、やわらかい関西弁のイントネーションがよく似合って、われわれは喝采し、大いに楽しんだ。

翌朝は、八時出発、日本武尊の父君、景行天皇陵へ向う、大和第二位の雄大な陵域で、古代を生きた英雄の古墳は、今もなおロマンを感じさせるものがある。

続いて野見宿祢と、当麻蹴速の相撲の故事による相撲神社、次に、穴師坐兵主神社、美しく鎮まります社殿に驚く、祭神は、はっきりしないそうだが、その名から鉱物、金属を扱う職種集団の祭神であろうと思った。古くから住む当地の人達が大切に崇敬されたものであろう。門標に穴師地区とあった。

山の辺を往く前方に三輪山が、お碗を伏せたように横たわる。

纏向川を渡って桧原神社へ、三つ鳥居に象徴される当社は、三輪山を神体とする。

続いて玄賓庵、山道のほの暗い細い道を歩いて、狭井神社、やがて壮大な大神神社へ。ここも本殿はなく重文の拝殿と、その奥に三つ鳥居と三輪山が拝まれる。ここは酒神としての信仰も厚く、菰かぶりが蔵元から沢山奉納されていた。

次は、崇神天皇端籬宮跡、海拓榴市観音へ石仏が素朴な美しさで二体鎮座ます当地は、古くから初瀬川を利用した。交易の大集散地で、大きい市が立っていた由、人の交通物資の流通、或は裁判も行われ、祭祀も行われたらしい。又、歌垣も盛んであった由。

やがて、胸踊らせていた、倭迹迹日百襲姫命の伝承のある箸墓へ、卑弥呼と同人であると、大和説に古くから伝えられ、実に古色蒼然としてわれわれに迫つてくる。次に、話題の纏向石塚古墳へ、その日はとても寒かったが、胸のうちには名状し難い熱いものがあふれた。この度、倭の国の、たたなづく青垣を、木を以て歩くことができ、時たますれ違う人達ともごく自然に「こんにちは」と、言葉をかけ合い、山の辺の昔をやさしい風景の中で知り、なんとなく溶け込むことができた。

〝任申の乱〟の質問のやりとりの中で「なに妊娠の乱」と、びっくり問答など、足の痛さも忘れ去るような愉快な七人組みの旅であった。

誰ともなく童謡を歌い継ぎ歩いた

山の辺よ、神々を祭つた道よ、ありがとう。

第二回郷土史講座
銀山城と杉原氏

今年第二回目の郷土史講座は、来る三月の徒歩例会「銀山城登山会」の勉強会を兼ねて、銀山城とその城主であった杉原氏について講演を行います。講師は、当会の木下和司さんが担当します。

今回の講演では、まず近年の通説では備後生え抜きの国人と言われている杉原氏の出自についてお話しします。次に戦国時代備南に覇を唱えた山名理興、そして毛利家家臣として活躍した杉原盛重と銀山城の関わりについてお話しします。

※会場が変更になっています。

《実施要項》

日程　二月二十二日（土）
時刻　午後二時～四時
会場　福山市民会館二階会議室
講師　木下和司
参加費　百円程度（資料代）

岡山城築城四百年記念行事

種本　実

今年岡山城が築城四百年を迎える記念行事の一つとして、昨年十一月二十三日に、「宇喜多直家　国取り物語」と称するイベントが邑久町をはじめ、宇喜多氏ゆかりの岡山市近郊七会場で行われた。

このうち、岡山城での催しを見学することが出来ましたので以下、概要をご報告します。

午後一時、金の鯱（しゃち）を取り付け「金烏城」と復活した天守閣前の庭で、二時間余り宇喜多秀家挽歌、烏城ロマン演奏などなどのプログラムがありましたが、この内忍者パーフォーマンス、鉄砲隊、武者行列には観客を魅了させる迫力がありました。

忍者は女性や子供を含む数名が舞台狭しと組み合い、切り合い、更に手裏剣やカマを投げたりと、一寸も目を離せない、手に汗を握る実演のスリルがありました。最も感嘆したのは！。見物席の真中に座らせた相手の頭に植木鉢をスッポリ被せ、その鉢めがけて鎖に付けた分銅をブルブル振り回しながら気合一閃、分銅が飛ぶと見事鉢は砕け散り、無論相棒は無事だつたのです。

約十名の鉄砲隊の、火縄銃を手にした一連の射撃の動作は一糸乱れぬ凛然としたものでした。一斉に射撃したときの爆音と、立ちこめる硝煙の実際を見聞しながら、揃えた鉄砲三千挺とも伝わる長篠の戦いの、すざましいかったであろう戦闘の模様に思いを馳せました。永禄九年と云えば毛利氏が月山富田城を開城した年、同年宇喜多直家の命を受けて、遠藤又次郎が三村家親を射殺した際使用したのは〝二つ玉込みの短銃〟だったとか。一五四三年に鉄砲が伝来してわずか二十三年後、彼がなぜこのような進歩した銃を持つことが出来たのか興味深いことです。

圧巻は最後の武者行列でした。幼年期、青年期、壮年期の三人の直家に、長髪を束ねた侍女、鎧や太刀、具足を付けた侍大将が寄り添い、陣笠に槍を携えた足軽隊を含め総勢九十五名の武者は、直家の出身地邑久町に早朝五時に集合し、バスと徒歩で砥石城他ゆかりの城跡をたどりながら午後三時すぎに岡山城に着いたのです。武者二十五人は地元から推薦された方、五十五人は一般公募した二四九人から抽選で選ばれた方だそうで、着用した鎧は十キロもあり現代人には重労働の行進であつたに違いありません。これは京都のイベント会社から借りたとのこと。

最後に岡山市長が、「宇喜多直家の志をついで、住みよい市政に励みたい」と挨拶されました。盛大なイベントの模様を直家も草場の陰から見物し、感慨無量の喜びに浸ったのではと思いつつ城址を後にしました

尚、昨年の大晦日から元旦にかけて築城四百年の祝賀セレモニーが盛大に開かれたそうです。

ちなみに、福山市においては平成四年に「福山城築城三百七十年記念行事」が、同年九月十五日から二十四日まで各種行事が開催されたことは記憶に新しいところです。このうち二十三日には「福山お城まつり」として、華やかな時代行列が繁華街をパレードし、市民に往時をアピールしたのでした。

また、今年の大河ドラマ「毛利元就」の孫、輝元が築城した広島城は平成元年に築城四百年を迎えています。

余談ですがー。

宇喜多直家といえ「梟雄（きょうゆう）」と蔑視されるなど、悪評があります。梟は親でも喰い殺すという残忍な習性に重ねた評伝です。

ですが信長や、天下を取った秀吉など、彼以上に悪逆非道に徹した戦国武将は珍らしくありません。永井路子氏は著書「山霧」で、毛利元就を「梟雄」と述べていますが、乱世に名を残した武将は、皆「梟雄」だと言えるのではないでしょうか。中でも七十五歳の生涯を、権謀術策によつて大大名に駆け上がった元就こそ、「梟雄」の異名が最も相応しい武将ではなかったかと私は思っています。

第三回郷土史講座
毛利元就と備後

今年のNHK大河ドラマは皆さんご存じの「毛利元就」です。そこで第三回郷土史講座は田口会長に「毛利元就と備後」の関係についてお話しして戴きます。いつものように興味深いお話しを聞かせて戴けるに違いありません。この講演会は、四月のバス例会「毛利元就の史跡巡り」に合わせて行うものです。

《実施要項》

日程　三月二十九日（土）
時刻　午後二時～四時
会場　中央公民館
講師　田口義之会長
参加費　百円程度（資料代）

山口県に大内氏、毛利氏の古跡を訪ねて

小島　袈裟春

滅びるものは美しい・・・・・・・

そう言った人がいる。

『平家物語』は平家一門の横暴と、その没落を記した、叙事詩と一般に云われているが、私は滅び行くものの美しさと其の因縁がテーマーになっていると思う。

織田信長の生涯も、豊臣家の滅亡も其の例に漏れない。

戦国時代、九州中国で七ヶ国の大守として周防国山口に本拠を構え、西日本の中心地としての役割をはたし、荒廃した「都」京都に代って、「西の京」と称えられた美しい町並を営りあげた、大内一門の滅亡も又栄枯盛衰・愛憎こもごもの、哀しくも美しい物語に満ちているのであった。

天文五年（一五三六）第三十一代の当主大内義隆は、大内氏歴代の念願であった、太宰大弐に任命された。重臣の陶興房ほか一門の活躍の賜である。

かって将軍義稙を京都に戴いて、管領代として政治を補佐した父、義興に劣らぬ栄誉であって、大内氏の全盛時代が実現したのであった。

天文八年（一五三九）その重臣の陶興房が死去した、嫡子隆房（後の晴賢）が後を継いだ。

翌天文九年、大内氏方の毛利元就の居城、安芸国、郡山城を出雲国の尼子氏が大軍を以て攻撃した時、援軍の是非を定める軍議の席で大義を説いて出兵と決め、自ら先陣を努めて戦い、翌年正月、尼子の大軍を敗走させて大内家の存在と権威を高めた事は、陶隆房の初手柄であった。しかし隆房は是を自分の力量だと錯覚したのである。

翌天文十一年（一五四二）前年の尼子軍の敗走を見た日和見武士どもが連判状を出して、尼子氏の本拠出雲国富田城攻撃のチャンスと進言して来た時、真っ先に賛成したのは、陶隆房であった。

反対したのは大内義隆の側近、相良武任である、彼は隆房の父、陶興房の云い残した戦略を引いて、尼子氏は強敵である、先ず石見国を完全確保した後進攻し、勝たずとも敗れざる戦略を取るべきだと主張した。

両者が対立したが、大内一族の冷泉隆豊が仲裁し、出雲への攻撃を決定したのであった。

出発は天文十一年一月、だが戦況は思い掛けない苦戦で翌年の五月、富田城前面で日和見武士どもが一斉に尼子方に寝返ってしまった。

大敗北である。逃げるしかなかった、しかも敵地、尼子軍の追撃をうけて死傷者は数知れず、義隆の後継者と定めていた晴持迄が死んでしまった、生れて始めて戦いの厳しさを知った事であろう。

以後大内義隆は極力、武を避けて文の道を歩む事になる。

講師の田口先生は是に関して、大内義隆には二つの性格があると喝破された。私は其の言葉を聞いて、胸のもやもやが晴れた様な気がしたのである。

私は今まで大内義隆については凡将、又は文弱とのみ思っていた。

それは私のみでは無いと思う。

書々にも義隆を褒めた文は余りない『陰徳太平記』にも義隆については「尭の子、尭に似ず」又は「尭、丹朱を措いて舜に譲る」と云った言葉が随所に出てくる、此の言葉の語源については諸兄の方が詳しいと思うので省くが、簡単に云えば、親の偉業を継ぐ資質に欠けた子、の意味である。

義隆は本当に不肖の子であったのだろうか、義隆が父義興の後を継いだのは享禄元年（一五二八）二十一

才の時である。

以後天文五年二十九才で、重臣達の助けがあったにせよ、太宰大弐に任命され、又対明貿易を独占し数々の遣明船を派遣して、財政の充実に務め、位階は従二位までも昇進し、七ヶ国の守護職となって大内氏の全盛を築きあげたのは彼であった。

その義隆を先入観を以て凡将と考えた事は私の勉強不足であった。

講師の田口先生に感謝しなければならない。

大内義隆が公卿達と交遊したのは父義興の様に京都に入る事を考えての事であろう、都に重きをなすには武力のみでは難しい、七ヶ国の大軍と共に学問、手引も重要である。

陶隆房はこの義隆の方針転換に対して公然と批判を始めた。

出雲での大敗の後、主君義隆の心が相良武任に向った事で、重臣筆頭の面目を失ったと思ったのであろういや義隆を憎んだのかも知れない。

彼は若い頃、義隆とは、衆道？の関係にあった、との事である。

疎んぜられれば憎さもつのる。始めは批判を相良武任に向けたが、武任が家中の和平を願って引退した後も、批判は続き遂にクーデターへと突き進んだのであった。

『陰徳太平記』には陶隆房の性格について、人の意見を聞かぬ者と記してある。重臣筆頭ならばその一言は重く「金鐵の如し」であろう、が陶隆房の場合は偏狭、独善的で視野に欠け、大局の判断が出来ぬ男、と云う意味の様だ。

さて義隆は意外な程隆房を信じている、謀反の噂はかなり以前から山口の街中に広がっていた、義隆の耳にも入っていた、其の時期迄もほぼ推定されていた、側近達も進言していた、しかし義隆は実効のある手段は何もとらなかった。そこが義隆の文弱無能と言われる所以であるが、私には「信じていたのだ」と思う。

「噂を信じて隆房を殺した後、万一無実と分かった時、取り返しはつかぬ」と義隆が云ったと云う、『陰徳太平記』の記事は意味深く、それはそのまま、陶隆房の頭上に掛かる事になる。

天文二十年（一五五一）九月一日深川大寧寺（現、長門市）に於いて大内義隆の主従一行は自決した、それぞれに辞世を読んで立派な最後であった。

義隆の子女も皆殺された、それぞれに潔ぎ良かった。京都から来ていた公卿方も、殺された。陶隆房の謀反は大成功であった。

しかし大内氏が亡んだ訳ではない陶氏も大内の一族である。隆房か又は子の長房が大内氏を継ぐのが当然である。しかし隆房は豊後の大友義鎮の弟、晴英（大内義隆の姉の子とも云う）を迎えて、義長と改名させ大内氏を継がせた。隆房は自分の思い通りにならぬ義隆を殺し傀儡政権を作ったのである。

この外、陶隆房のやった事を挙げて見ると、出家して号を全薑と称し義長の名前、晴英に因んで名を晴賢と変え、逆賊隆房とは別人のつもりになった。謀反仲間の重臣、杉重政（矩）を大内義隆殺害の張本人だとして、急襲して切腹させ首を獄門に掛けて、旧主義隆の遺恨を晴らしたと公言した。陶晴賢（隆房）は治政のポリシーも節操もなく、只義隆憎しの謀反である事が判る。

義隆を盛りたてた父、陶隆房の功績を地に落としたのである。

「尭の子、尭に似ず」の批判は其のまま陶晴賢に与えるべきである。

大内義隆の過ちは冷泉豊隆等の意見を用いず、陶一派を誅殺しなかった事に尽きるであろう。

陶晴賢の厳島への渡海も彼に戦略も戦術も無い事がわかる、彼の有力武将は全員危険だとして反対した、賛成は三浦房清只一人。以前に厳島は安芸経略の「扇の要」と云った、毛利元就の言葉を丸呑みしたのが、晴賢の戦略の限界なのである。

「罠にはまった」と云えよう。

弘治元年（一五五五）十月一日払暁から始まった厳島の決戦は毛利元就方の大勝利に帰し陶晴賢は腹を切って死んだ。

この後の大内方の内訌と裏切りは目を覆うばかりである。

元就は僧主、大内義長を長門の功山寺に追い詰めて腹を切らせ、その一族と陶氏の遺児、鶴壽丸も殺し、両氏を根絶させたのである。

時、弘治三年（一五五七）四月三日のことであった。

さて遺蹟を訪ねる旅は陶氏の本拠地、富田（山口県新南陽市）の建咲院と勝栄寺から始まった、両寺とも陶氏の建立であるが、毛利氏四百年の歴史の中で創建の意義は薄れ、寺宝は前者が元就の袈裟や数珠、後者は元就が三子に与えた教訓状「霜月二十五日（弘治三年）」を認めた所と自慢し、陶氏の事は影もなかった。

山口市内は瑠璃光寺五重塔、常栄寺及び庭園等、流石に大内時代の面影が濃く残り、西の都の当時を偲ぶよすがとなった。又陶晴賢の死後、内藤氏と杉氏、両重臣間の内戦によって、全焼した大内館の築山殿跡に移築された八坂神社も古式を留め

て一見の価値がある。大内館の跡に建つ、龍福寺を含めた付近一帯は観光客の姿も無く、唯一片の煙りと消えた大内御殿の殿上人達の、昔日の賑わいを示すが如く、墓石の群れが立ち並んでいたのであった。

最後に尋ねた古熊神社は重文の建物に新しい檜皮葺の屋根を載せて優雅に佇んでいた、若い神主さんは新しい屋根が自慢で微笑ましく、私達にも檜皮止めの竹釘をプレゼントして下さった。

大内弘幸（第二十三代）の墓に案内して頂いた別れ際、気に掛かっていた事を聞いてみた・・・・私「山口市やその周辺に大内姓を称する人が居りますか」、・・神主さん「一人も居りません」。

毛利氏は大内姓を立てる事を許さなかったのであろうか。

一九九六年十一月

第七六号原稿募集のお知らせ

「備陽史探訪」第七六号の原稿を募集します。内容は自由で一行十六字×一二〇行以内でお願いします。なるべく多くの方の原稿を掲載するため、字数厳守でお願いします。

編集は久しぶりに「磐座亭主人」さんが担当します。多数の原稿をお願いします。

丹波亀岡史跡めぐり

門田　幸男

紅葉まっさかりの十一月廿四日家内と知人の三人連れて小旅行をしました。最初に紅葉の名所箕面公園へ向かったが休日のこととて車々の長蛇の列。車を止めて降りることも出来ず仕方なく通り過ぎて丹波亀山に向かいました。通りがかりに立ち寄ったといえば、神様に失礼だが最初の史跡が鍬山神社です。社伝によればオオナムチの神が丹波を切り開かれた時、その開拓につかった鍬が山になったので鍬山と名付けられたのだそうだから随分古い話です。同じく亀岡市の千歳町には出雲大社の宮（丹波国の一宮）がありオオムナチの神が祀られている丹波地方にも出雲の勢力圏あったのでしょう。又、近くには丹波国分寺跡もあるから、亀岡市は丹波地方の中心的位置を担っていた事は確かだと思います。国分寺跡から少し山に登った所に愛宕神社があります。樹齢千年にも及ぶのではないかと思われる杉の大木があり、この社の古さを無言のうちに物語っている感じで圧倒されます。これに比べれば鍬山神社も出雲大神宮もかすんでしまいます。亀岡と京都の境の老の坂（大枝の坂がなまったものと言われています。）の峠に酒呑童子の首塚なるものがあります。実在したのかどうか疑わしい人物？ですから発掘してみればいいのにと思うのですが、まず先に考えてみることにする。

「酒呑童子」とはなにか、私の解釈を以下に述べます。

大の男であるのに童子と名乗るのはなぜか。今風に言えば官の統制の枠組みに、納税等の義務を負うことを拒否する為と考えられない事もありませんが、都の鬼門（東北）に位置する比叡山に住んでいた（謡曲大江山）と語っている事が解決の糸口となると思います。比叡山の麓の八瀬の住人は自ら鬼の子孫と名乗り童子と呼ばれて、比叡山の高僧の牛車を預かり、牛を飼いその牛車を御した（柳田国男説）そうです。易の考え方によれば、鬼門と言われる東北は艮（後天易）の小男（男童）の位置であって、その艮の表わす自然現象は山なのであります。だから比叡山の高僧の牛車の世話をする者は童子でなければならないとされたのです。この牛（丑）ですが時間にとれば草木も眠る丑満時と言うように真暗闇の夜中であります。現代社会では終夜明りが灯されていますが、昔の夜、即ち闇であり百鬼夜行というように闇は鬼の世界なのです。和名抄（最古の辞典）にも鬼とはかくれて顕はれる事を欲しないので俗に隠と言う書かれています。よく見かける鬼の絵は牛と同じ角を持ち虎の皮のパンツをつけているのも、即ち艮（丑寅）を可視的に表現しているわけなのであって、鬼なる生物が存在するわけではありません。酒呑童子は原則通りに山に住み鉞を手にしています。盗賊なら刀ぐらい盗むのは易いこどしょうが、鉞は大型の斧だから、林業に従事する者の道具です。この林業者（別名、マタギ又は山窩）は昔住所不定で官の統制が及ばなかったので盗賊ではなくても徴税する側から目の仇にされ、何かと因縁を付けて討伐される事になるのだと思います（私論）。尚、鬼について詳しくは、吉野裕子著「神々の誕生」の鬼の誕生の項をお読み下さい。

時代は降って足利尊氏旗揚げの地と言われる篠八幡宮へ参拝して予定の宿泊地亀山城下に入りました。皆さんご承知のように亀山城は明智光秀の居城でしたが、みる影もなく荒れ果てていたのを大本教主・出口王仁三郎が譲り受けどうにか見られる

ように修復しています。出入り自由ですが神域として禁足地もありますので注意して下さい。一夜明けて前日は旗揚げ地を訪れたので、釣合に足利尊氏誕生の地と言われている綾部市安国寺へ向かう途中、史跡といえるかどうか分かりませんが、穴太寺にお参りしました。仁王門にある立派なお寺ですが、今は道路の方が高くなっていて名前の通り穴の雰囲気です。地名が穴太ですから亀岡地方は昔、湖か湿原であったのでオオナムチの開拓話も生れたのかもしれません。保津峡がつぶれたりすれば湖となるはずです。舞鶴線ふちがき駅から少しはいった所に安国寺がありました。紅葉が美しく藁葺屋根の本堂が美しい静かなお寺であり、また門前に尊氏産湯の井戸と表示された井戸もありますが、真偽の程は不明です。箕面方面に懲りて保津峡にも行きませんでしたが、亀山城跡も綾部の大本教本部も紅葉が美しい所です。十一月中頃に行く機会があれば立ち寄られる事をお推めします。一言挨拶して入られるとよいでしょう。

古事記講座で紹介した産屋は、綾部から国道一七三を七キロ程南下した大泉と言う所にあります。イザナギ時代の産屋もこんなだったと思える古態を残す記念碑的存在です。

暁部隊と備後護国神社

小林　定市

第二次大戦末期の福山空襲を記す『福山市史』は福山空襲の際「我軍ノ防戦トシテ見聞セシモノ無シ」と記し、又『福山空襲の記録』も防戦に関する記録の記載は全く見当たらないのであるが、此の記録は果たして真実だったのであろうか。

米軍の空襲は大都市から始まり次第に中小都市にと波及し、福山も空襲の順番が回って来たのである。空襲に先立ち米空軍は数回の偵察飛行で軍事上の重要拠点であることを充分把握していた。『福山空襲の記録』に記された米軍調査資料に依る福山は、①人口五六六五三人、②歩兵四一連隊（実は全軍出陣・暁部隊が入営）、③三菱電気で航空機部品製造④帝国染色工場（日化）他、多くの小規模工場群。

また、米空軍機に対する福山の防空防御能力は、高射砲二一門、中高射砲十五門、サーチライト二六基、高射砲（高角機関砲）の最高高度射程距離は三六〇〇m以下。

昭和二十年八月八日、米五八航空部隊のB二九・九一機（実行機九三機）は、小笠原諸島南方の硫黄島を発進。航空路を北北西に飛行し高射砲陣地の無い、高知県の東端徳島県境に近い松下ヶ鼻岬から、四国山脈を越え、香川県の庄内半島（詫間町）六島・大飛島・芦田川と、硫黄島から福山まで一直線に飛来し、高度を四〇〇〇～四二〇〇mの範囲に保ち夜十時十五分から約一時間十分の間に、約五四〇tの焼夷弾を投下して全機無事に帰還している。

報告書は、福山市に於ける爆撃中の対空砲火として、貧弱で不正確だが猛烈であったと三機が報告、中規模程度の対空砲火と約二十機が報告していた。

日本軍が沖縄戦に敗れ、本土決戦が叫ばれ出すと、戦争に勝つため国民学校（現在の小学校）の学童も食料の増産に協力するため、海や川でアサリ貝やシジミ貝の貝堀り、椎の実・樫の実・蓬・嫁菜等の野草の採集。山奥から薪炭材料の搬出にも従事していた。当時は自動車の燃料が払底し堅炭を燃料として用いた。

四一連隊が福山から出陣し、続いて連隊に入った暁船舶歩兵連隊の一隊二・三十名は、兵器を帯せず水呑村洗谷の奥、鎌研山と柳谷の国有林に分け入り、軍の燃料を自給自足するため炭焼き作業に従事していた。四一連隊の兵は常に銃を携行して山野で演習していたが、武器を携行せずして山作業に従事する暁部隊の兵は一見奇異に見えたが、実は暁船舶歩兵連隊には福山防空の大きな責務が課せられていた様である。

大正八年（一九一九）の福山大水害後、堤防の改修で草戸村内（現在の競馬場）の鷹取川河川敷が廃川地となっていた。そこに暁部隊の一分遣隊が高角機関砲陣地を構築し数門の機関砲を据えていた。陣地の四囲に高い堤防を巡らせ電柱に電線を引張り、一〇cm前後の模型飛行機をぶら下げて移動させ、機関砲の射撃訓練をしている姿が見られた。また機関砲陣地の西北（現在の市体育館）には、数年に亘る築造工事でほぼ完工直前の備後護国神社があった。

旧河川敷の広い場所が残されていたから機関砲陣地を構築したのか、護国神社を防衛するためなのか不明であるが、大津野飛行場を襲撃した米軍のグラマン戦闘機は、超低空で機関砲陣地に機銃掃射を浴びせかけていたが、機関砲部隊も果敢に応戦していた事が数回あった。

八月八日夜、B二九の大編隊が焼夷弾を投下すると、市の周辺から一斉に大火災が発生した。米軍が多く投下した集中焼夷弾（一束三六本）

は騒音と共に落下し、地上数百m上空で四散火の雨を降らせた。連隊及び草戸村の機関砲陣地は、即座に猛烈な対空射撃の反撃を開始した。しかし、残念な事に旧型の低性能機関砲だったため、B二九迄砲弾は届かず、徒に砲弾は火の点線となり大きな円弧を描いて落下するばかりだった。敵機撃墜の戦果をあげる事ができない事を知りながら、それでも砲兵隊の士気は高かった様で大火災の煙を越え機関砲の弾は飛び続けていた。そのためか暁部隊では戦死者を十余名出した模様である。

現在、草戸村護国神社関係の資料は見当たらないが、当時作成された石造文化財を見ることにより其の一端を知ることができる。

護国神社は、従来備後に造営された神社の中では例を見ない最大級の規模だった様で、戦没者の英霊を祭るため草戸村に創祀された神社で、数年掛けて女子学生迄動員して造営が進められた壮大な神社であった。

やがて護国神社に焼夷弾が命中し建造物群は紅蓮の炎に包まれてしまった。福山城天守閣の炎も天高く昇っていたが、八〇〇mの至近距離から見た護国神社の大火災は今もって忘れ去る事が出来ない。

護国神社跡の遺構として見られる文化財は、体育館北方の旧鷹取川に架かる石造太鼓橋（幅八・二m長さ十一・五m）。

大鳥居、戦後同地の砂地に埋納していたが後掘り出して丸之内の護国神社（元阿部神社）、西南西百数十m先の道路に建つ、石柱には「昭和十八年九月吉日・三菱電気株式会社」の刻字がある。

大鳥居、三蔵稲荷北方路上に建つ鳥居、石柱に「昭和十九年十一月吉日・福山市赤垣幾四郎」の刻字がみられる。以上三ヶ所に石造文化財が残されているが、橋・鳥居何れも福山市では最大級の大きさである。

福山市教育委員会や公園課は、体育館の前身が備後護国神社跡と知ってか知らずか、体育館前方の道路を「アジア彫刻の道」として整備し、和風の石造高欄擬宝珠太鼓橋の前方に、派手な洋風トイレを新設しているが、和の神聖な橋と洋の近代的な風景は異様に見えるが、設計の段階で十分検討した後、トイレをあの場所に設置したのであろうか。

また、「アジア彫刻の道」には多額の市費を投入しているが、前記の昭和三大石造文化財には、制作の経過・由緒を示す標示板さえ見当たらず、福山市民が忘れ去ってもよい程の無価値なものだったのだろうか。

元就出陣

後藤　匡史

一、朝霧深かし吉田の街の
　小さき領主の子に生まれ
　民の心を糧として
　郡山城百万一心

二、雨と風との夜陰にまぎれ
　山野に響く鬨の声
　勝か勝々の合言葉
　ここが勝負の決戦厳島

三、夢は大きく望みは高く
　知勇兼備の道を行く
　艱難辛苦の七十五年
　毛利両川三矢の遺訓

※事務局からのお知らせ

【原稿募集】

『山城志』第15集の原稿を募集します。発行予定は、今年の十二月です。原則として日本史・郷土史をテーマとした論文・小説等です。但し原稿は内容の審査を行い、掲載出来ない場合もあります。

原稿締切は五月末とします。集まらない場合は締切を延長します。

復刻版『備陽史探訪』ついに完成

会員の皆さんお待たせしました。

平成七年度の「福山文化賞」の受賞を記念して復刻版「備陽史探訪」（四六～七〇）が完成しました。総会で見られた方もいらっしゃると思いますが、懐かしい原稿が満載です。田口会長のあの原稿、出内先生のあの原稿、山口さんの紀行文、平田さんの名編集等見所が一杯の復刻版です。

今年度の総会で既に見られた方々はご存知でしょうが、すばらしい出来映えです。いつも見なれた会報とちょっと違って、製本された原稿はすばらしく立派にみえます。原稿をいつも書かれている方も、会報を読まれるのを楽しみにされている方も是非、ご購入して下さい。

『復刻版　備陽史探訪』
・総ページ数　340ページ
・定価　1500円

会の各行事で販売しますので、宜しくお願い致します。

または、「備陽史探訪の会」事務局までご連絡下さい。

平成九年度総会開催

一月二六日（日）午後三時四〇分より、福山市の遺族会館で平成九年度備陽史探訪の会総会が開催された。

冒頭、田口会長が、例会等の諸行事をよりいっそう充実させ、学術面でも掛迫六号古墳の報告書の作成、歴民研の石造物調査など、今年度も活動をさらに活発化させていく決意披露した。

続いて神原正昭氏を議長に選出し、議事に移った。

まず、平成八年度活動報告、同決算報告、同監査報告と続き、それに対して参加者から活発な意見や質問が出された。そのそれぞれに役員から回答があり、いずれも了承された。その上で諸報告について全員一致で承認された。

引き続き、平成九年度活動計画案、同予算案が発表され、承認されました。その後、質疑応答があり、この場でも会の運営について建設的な意見が相次ぎ、例年以上の充実した総会となった。

議長解任後、馬屋原副会長が閉会の辞を述べ、午後五時一〇分、総会はつつがなく終了した（総会の式次第は下段に、また、承認された主な内容については次ページに掲載）。

平成九年度総会式次第

（1）開会の辞　司会　平田恵彦
（2）会長挨拶　田口義之
（3）議長選出
☆神原正昭氏を全会一致で選出。
（4）平成8年度活動報告
・基調報告　事務局　木下和司
・城郭部会　副部会長　杉原道彦
・古墳部会　部会長　山口哲晶
・歴民研　副部会長　平田恵彦
（5）平成8年度決算報告
事務局会計　佐藤秀子
監査委員　藤井忠夫・杉原外志子
☆活動報告、決算報告は全会一致で承認された。
（7）平成9年度活動計画発表
・基調活動計画案発表
事務局　木下和司
・城郭部会　副部会長　杉原道彦
・古部会　部会長　山口哲晶
・歴民研　副部会長　平田恵彦
（8）平成9年度予算案発表
事務局会計　佐藤秀子
☆活動計画案、予算案は全会一致で承認された。
（9）その他（提案・質疑等）
（10）議長解任
（11）閉会の辞　馬屋原亨

本年度備陽史探訪の会役員一覧

本年度の役員（前年度選出、任期二年、本年度末まで）は次のとおりです。

名誉会長　神谷和孝
会長　田口義之
副会長　山口哲晶、中村勤史
馬屋原亨
参与　中西晃、末森清司、後藤匡史
佐藤洋一、種本実、棗田英夫
柿本光明、廣川茂夫
事務局長　七森義人
事務局員　佐藤秀子、佐藤錦士
寺崎久徳、木下和司、日野雅友
（歴史民俗研究部会）
部会長　神谷和孝　副　平田恵彦
（古墳研究部会部会）
部会長　山口哲晶　副　網本善光
（城郭研究部会）
部会長　出内博都　副　杉原道彦
★監査委員　藤井忠夫、杉原外志子（留任）

お詫び

事務上のミスで今回の総会の案内（行事案内）が一部の会員のお手元に届きませんでした。

ここに陳謝し、今後このようなことがないように注意いたします。

事務局

平成9年度会報・行事案内発送計画

1／11（土）行事案内
役員会後に発送作業。
2／8（土）会報75号
（『古事記』を読む終了後作業）
3／8（土）行事案内と『山城志』第14集（予定）
（『古事記』を読む終了後作業）
4／19（土）会報76号
（「中世を読む」終了後作業）
5／17（土）行事案内
（「中世を読む」終了後作業）
6／7（土）会報77号
（事務局による発送作業）
7／12（土）行事案内
（『古事記』を読む終了後作業）
8／2（土）会報78号
（事務局による発送作業）
9／6（土）行事案内
（事務局による発送作業）
10／4（土）会報79号
（事務局による発送作業）
11／8（土）行事案内
（『古事記』を読む終了後作業）
12／6（土）会報80号
（事務局による発送作業）
☆以上はあくまでも予定です。都合により日程を変更する場合がありますのでご了承下さい。

《城郭研究部会活動報告》

①月例研究会「中世を読む会」
第三土曜日午後七時から中央公民館で開催。『備後古城記』を読む。一書精読。一〇名～一八名参加。

②郷土史講座担当
6／29『備後における福島正則の足跡』　杉原道彦
9／28『毛利の備作進出と秀吉』　出内博都
11／30『長和庄の長井氏について』　小林定市

③バス例会　4／14『東城町の史跡巡り―』　講師　出内博都

④徒歩例会「水呑町の史跡巡り」
12月8日（日）の講師担当。約五〇名が参加し、大盛況となった。　講師　田口義之・小林定市

⑤一泊旅行の解説
大内・毛利氏についての資料を作成、車中や現地で解説を担当した（出内）。

⑥立石定夫先生追悼『矢筈城登山会』
（11／17）の資料作成と講師を担当。

《古墳研究部会活動報告》

①第14回「親と子の古墳巡り」
5／5担当。福山市教委と共催。加茂町～駅屋町の古墳。参加は約一三〇名。小学生が多数参加。

②郷土史講座担当
七森義人『古代ののろしについて』
網本善光『吉備の巨大古墳の謎―吉備王権は存在したか―』
山口哲晶『瀬戸内沿岸部の古墳について』

③第八回秋の古墳巡り『吉備の弥生墳丘墓を探る』担当（11／10）。
宮山墳墓群などを探訪。

④「古墳講座Ⅲ」毎月第一土曜日
講師山口・網本。中央公民館で。毎回八名～一五名が参加。

⑤掛迫六号古墳測量調査実施
7／14に終了。会員の皆様に感謝。

《歴史民俗研究部会活動報告》

①郷土史講座担当　中央公民館
2／24『松永の歴史―馬取貝塚から本庄重政まで―』　田口義之
5／25『福山の神社信仰』　神谷和孝
7／27『中世の建築―明王院と浄土寺を中心として―』　木下和司

②バス例会『岡山の旧住宅を訪ねて―輝きはいまも消えず―』
（7／14）担当　神谷・平田

③毎月第二土曜日『古事記』を読む
毎回二〇名程度参加。神谷・平田・門田幸男・佐藤壽夫が講師

④福山加茂町石造物調査実施
第一回12／1、第二回12／15

《城郭研究部会活動計画》

①月例研究会「中世を読む会」
第三土曜日午後七時から。中央公民館で開催。『備後古城記』を読む。今年も継続してやっていく。

②郷土史講座担当
『杉原氏と山手銀山城』
2／22（土）　木下和司
『毛利元就と備後』
3／29（土）　田口義之
『応仁文明期の山内首藤氏』
6／28（土）　出内博都
『御調郡竹満荘小原合戦私考』
9／28（日）　小林浩二

③山城調査
一年間休止していた山城調査を再開する。3／9（日）芦田町柞磨の『湯舟城』の測量調査を実施する。参加希望者は出内部会長へ。その他にも山城の測量調査を予定。

④バス例会担当
11／16（日）『庄原雲井城に登る』

⑤徒歩例会
3／23（日）『山手銀山城に登る』

《古墳研究部会活動計画》

①掛迫六号古墳調査報告書の作成
平板測量は、皆さんの協力では大成功のもとに終了することができた。優れた報告書を完成させたい。

②第15回「親と子の古墳巡り」5／5担当。
二子塚をメインとした駅家町の古墳を巡る。今年も福山市との共催にしたい。

③郷土史講座担当
4／26（土）『備南の後期古墳』　網本善光
8／30（土）『芦田川上流域の古墳』　山口哲晶

④第八回秋の古墳巡り
9／21（日）
『世羅台地の古墳めぐり』

⑤「古墳講座Ⅳ」毎月第一土曜日
二月からパートⅣを開始。今年は野外現地学習を中心に実施する。

《歴史民俗研究部会活動計画》

①郷土史講座担当
5／31（土）『備後の磐座信仰』　平田恵彦

②バス例会担当　6／1（日）
探訪地未定。四月中旬発表。

③毎月第二土曜日『古事記』を読む
中央公民館会議室。最強を目指して今年もしっかりとやっていく。

④加茂町の石造物分布調査
会のバス例会と重ならない限り、原則として毎月第二日曜日の午前十時に福山市加茂町賀茂神社に集合。その後現地に飛んで調査する。来年、報告書を出したい。

平成８年度活動報告

郷土史講座・特別講演会

日　程	講　座　内　容	講　師	会　場	参加数
１／28 (日)	『考古学における物理探査－ハイテクで地中を探る－』	西口和彦	県立歴史博物館講堂	約９０名
２／24 (土)	『松永の歴史－馬取貝塚から本庄重政まで－』	田口義之	中央公民館	６８名
３／31 (日)	『古代ののろしについて』	七森義人	中央公民館	１６名
４／27 (土)	『吉備の巨大古墳の謎－吉備王権は存在したか－』	網本善光	中央公民館	２４名
５／25 (土)	『福山の神社信仰』	神谷和孝	中央公民館	３３名
６／29 (土)	『備後における福島正則の足跡』	杉原道彦	福山城月見櫓	３５名
７／27 (土)	『中世の建築－明王院と浄土寺を中心として－』	木下和司	中央公民館	２０名
８／ 3 (土)	『備南の前期古墳』	古瀬清秀	県立歴史博物館講堂	約100名
９／28 (土)	『毛利の備作進出と秀吉』	出内博都	中央公民館	２０名
10／26 (土)	『瀬戸内沿岸部の古墳について』	山口哲晶	中央公民館	１６名
11／30 (土)	『長和庄の長井氏について』	小林定市	中央公民館	２５名
12／21 (土)	『江戸時代の和鏡について』	松村昌彦	福山ワシントンホテル	約４０名

バス・徒歩例会・古墳巡り・１泊旅行

日　程	行　事　内　容	講　師	参加数
３／10 (日)	徒歩例会『松永湾の史跡めぐり－旧山陽道を中心に－』	田口・坂本	９８名
４／14 (日)	バス例会『東城町の史跡めぐり－五品岳城に鉄砲をとれ－』	出内博都	５１名
５／５ (日祝)	第14回親と子の古墳巡り『加茂町～駅家町の古墳を歩こう』	山口・網本・篠原	約130名
６／９ (日)	バス例会『因島の史跡めぐり－村上水軍の光と影－』	木下・日野	５０名
７／14 (日)	バス例会『岡山の旧住宅を訪ねて－輝きはいまも消えず－』	神谷・平田	７３名
９／８ (日)	バス例会『井笠なぞ不思議旅－バスのことではありませぬ－』	後藤・七森	７６名
10/19・20 (土日)	１泊旅行『西の京　山口の旅－大内氏と毛利氏の盛衰－』	旅行委員	４６名
11／10 (日)	秋の古墳めぐり『吉備の弥生墳丘墓を探る』	山口・網本	５３名
11／17 (日)	立石定夫先生追悼『矢筈城登山会』	城郭部会	４０名
12／８ (日)	徒歩例会『水呑町の史跡めぐり－隠れた水呑を訪ねて－』	田口・小林	約４０名

定期講座

①毎月第1土曜日	『古墳講座Ⅲ』	古墳研究部会	山口・網本	中央公民館
②毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究部会	神谷・平田	中央公民館
③毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究部会	出内博都	中央公民館・市民会館

平成９年度活動計画

日　程	講　座　内　容	講　師	会　場
１／26 (日)	総会記念講座『福山の文化財』	池田一彦	遺族会館
２／22 (土)	第2回郷土史講座『杉原氏と山手銀山城』	木下和司	福山市民会館会議室
３／29 (土)	第3回郷土史講座『毛利元就と備後』	田口義之	中央公民館
４／26 (土)	第4回郷土史講座『備南の後期古墳』	網本善光	中央公民館
５／31 (土)	第5回郷土史講座『備後の磐座信仰』	平田恵彦	中央公民館
６／28 (土)	第6回郷土史講座『応仁文明期の山内首藤氏』	出内博都	中央公民館
７／26 (土)	特別郷土史講座　未　定	未　定	未　定
８／30 (土)	第8回郷土史講座『芦田川上流域の後期古墳』	山口哲晶	中央公民館
９／28 (日)	第8回郷土史講座『御調郡竹満荘小原合戦私考』	小林浩二	中央公民館
10／25 (土)	第9回郷土史講座　未　定	杉原道彦	中央公民館
11／22 (土)	第10回郷土史講座　未　定	篠原芳秀	中央公民館
12／13 (土)	特別郷土史講座　未　定	未　定	未　定

☆都合により日程・会場が変更になる場合があります。

バス・徒歩例会・古墳巡り・１泊旅行

日　程	行　事　内　容	講　師
３／16 (日)	特別企画　高速艇ツアー『元就ゆかりの水軍城を訪ねて』	鞆歴民資料館と共催
３／23 (日)	徒歩例会『山手銀山城に登る』	城郭部会
４／13 (日)	バス例会『毛利元就の史跡巡り－吉田郡山城に登る－』	田口義之
５／５ (日祝)	第15回親と子の古墳巡り『駅屋町の古墳を歩こう』	山口・網本・篠原
６／１ (日)	バス例会『未定』	歴民研
９／21 (日)	秋の古墳めぐり『世羅台地の古墳巡り』	山口・網本
10/11・12 (土日)	１泊旅行『山陰　鳥取の旅』	旅行委員
11／16 (日)	バス例会『庄原雲井城登山会』	城郭部会
12／７ (日)	徒歩例会『芦田町の史跡めぐり 』	田口・芦田郷土史会 (予定)

☆都合により日程・コースが変更になる場合があります。

定期講座

①毎月第1土曜日	『古墳講座Ⅳ』	古墳研究部会	網本善光	中央公民館
②毎月第2土曜日	『古事記』を読む	歴史民俗研究部会	神谷・平田	中央公民館・市民会館
③毎月第3土曜日	『備後古城記』を読む	城郭研究部会	出内博都	中央公民館

☆都合により会場・時間が変更になる場合があります。

平成８年度支出入決算報告

勘定項目	収入額	摘　要	勘定項目	支出額	摘　要
会　費	708,000	255名(26組)	会報印刷費	203,734	
	3,000×200=600,000		行事案内印刷費	27,510	会員名簿印刷含む
	1,500×　2=　3,000		復刻版印刷費	430,000	
	1,000×　1=　1,000		『山城志』印刷費	442,900	第１３集
	4,000× 26=104,000		通信費	318,770	切手代等
助成金	150,000	義倉より	部会活動費	72,137	古墳石造物測調査費等
書籍等販売収入	651,425	資料販売含む	一般経費・雑費	157,772	事務費・諸会費等
雑収入	243,104	例会収入等			
銀行利息	3,376				
繰越金	326,219		繰越金	429,301	
総　計	2,082,124		総　計	2,082,124	

監査の結果、上記の通り相違ないことを承認します。

監査委員　藤井忠夫、杉原外志子（印）

平成９年度予算

収入の部			支出の部	
項　目	予算額	摘　要	項　目	予算額
会費収入	730,000	3000円×210人	『山城志』印刷費	300,000
		4000円× 25組	会報『備陽史探訪』印刷費	220,000
			行事案内印刷費	30,000
雑収入	200,000	復刻版販売等	郵送・通信費	300,000
繰越金	429,301		部会活動費	100,000
			掛迫報告書代	100,000
			一般経費・雑費	180,000
			積立金(20周年準備)	100,000
			予備費	29,301
総　計	1,359,301		総　計	1,359,301

＊ 別途に特別積立金300,000円があります。

田口会長が毛利元就と備後について「ガイドマップ」と「パンフレット」を執筆！

この一月、田口会長が福山市からの依頼で、

「びんご・毛利元就ガイドマップ」

「備後戦国紀行―元就をめぐる備後の武将と山城―」

の二つの冊子を執筆されました。

前者は、福山市周辺の地図に元就と係わりのあった城跡・寺院・墓蹟を写真入で紹介したもので、その古跡と元就の関係を田口会長がいつもの分かり易い文章で、解説されています。

後者は、50ページ程度の小冊子でガイドマップと同じく元就と備後の国人衆との関係を解説したものです。会長、お得意の宮一族、杉原一族である山名理興・杉原盛重、また元就の盟友として備後で活躍した渡辺一族、悲運の古志一族等と元就の係わりを丁寧に解説されています。

（二月末発刊予定）

この二つの冊子は、福山市観光課等で入手できます。NHK大河ドラマ「毛利元就」を見る上でも大変参考になりますので、会員の皆様も是非お読みになって下さい。

特別企画　瀬戸内高速艇ツアー

元就ゆかりの水軍城を訪ねて

鞆の浦歴史民族資料館共催

今話題の毛利元就、その中国地方制覇の過程で、大きな役割を果たしたのが瀬戸内海を支配した「海の大名」村上氏でした。元就生涯の大博打、厳島の合戦の勝敗の鍵は彼ら瀬戸内の海賊衆が握っていたと言っても過言ではありません。

村上氏は、もともと伊予の守護大名河野氏を主君と仰いだ海上の武装集団で、平安時代にはすでにその活躍が見られ、戦国時代には能島・来島・因島のいわゆる三島村上氏として瀬戸内海の覇権を握っていました最近では作家の城山三郎氏が「見上げれば海」でその活躍を描いて話題を呼びました。

今回は、鞆の浦歴史民族資料館のご好意により、同館主催の村上氏の遺跡をめぐる海上ツアーに、共催として便乗させて頂くことになりました。能島・来島の水軍城【海賊城】や大三島の大山祇神社では当会のベテランが解説することになっております。またとない機会ですので奮ってご参加下さい。

《募集要項》

【目的地】 伊予大島・能島水軍城・宮窪町村上水軍資料館・大三島・大山祇神社・同宝物館等。

【日時】 三月十六日(日)
・午前七時三〇分鞆港集合
・午後五時三〇分鞆港帰着予定

【乗り物】 高速艇（チャーター）

【定員】 四〇名（備陽史探訪の会）

【参加費】 八千円（船賃・昼食代・入館料等含む）

【申込方法】 **二月二十八日**までに**往復葉書**に住所・参加者氏名・生年月日を記入して当会事務局までお申し込みください(定員に達し次第締切ますので、お早めにお申し込み下さい)。

【注意事項】
一、直前にキャンセルされる場合は参加費を頂く場合があります。
二、当日駐車場として、鞆の浦歴史民族資料館の前庭を開放して頂く予定になっております。

【お問合わせ先】 当会事務局まで

城郭研究部会からのお知らせ

徒歩例会　銀山城登山会

今年のNHK大河ドラマは「毛利元就」です。元就は備後にも縁りの深い武将です。そこで今回は徒歩例会として、元就旗下で「伯州の神辺殿」と呼ばれ、山陰計略に辣腕を振るった杉原盛重の居城・山手銀山城の登山会を行います。

山手・銀山城は、尾道の木梨家城城主であった杉原匡信が築いたもので、福山地方屈指の山城跡です。山頂一帯に石垣・土塁・竪堀等の遺構がよく残っていて、山城ファン必見の古城跡です。

《実施要領》

日程　三月二十三日（日）雨天中止
時間　午前八時三〇分
集合場所　福山駅南口「釣人像」
講師　城郭部会
参加費用　五〇〇円
（現地までの往復交通費は各自負担）
受付開始　三月一日（土）
※銀山城は観光用に整備された遺跡ではありません。したがって、今回の登山はいわゆる〝藪こぎ〟になります。参加される方はスニーカー・軍手・弁当・水筒等を準備の上、ご参加下さい

事務局日誌

○十二月一日（日）歴民研部会
「石造物分布調査」　参加十三名
○十二月七日（土）
午後「古事記を読む」参加十八名
夜間「古墳講座」　参加十名
終了後、会報七四号発送作業
○十二月八日（日）十二月徒歩例会
「水呑町の史跡巡り」参加五十名
講師　田口会長・小林定市氏
○十二月十四日（土）
第十二回郷土史講座
「江戸時代の和鏡について」
講師県立歴史博物館草戸千軒研究所所長松村昌彦先生
平成八年忘年会　参加四十名
於福山ワシントンホテル
○十二月十五日（日）歴民研部会
「石造物分布調査」　参加十五名
○十二月二十一日（土）
「中世を読む会」　参加十五名
○一月十一日（土）
午後「古事記を読む」参加十三名
夜間「役員会」於市民会館
○一月十二日（日）歴民研部会
「石造物分布調査」　参加十名
○一月十八日（土）
午後「古墳講座」　参加十五名
夜間「中世を読む会」参加十五名
○一月二十六日（日）
特別郷土史講座「福山の文化財」
講師　鞆歴史民族資料館館長代行
池田一彦先生
平成九年度　総会及び新年会
参加　五十二名　於遺族会館
※会場は特に記載がない場合は、中央公民館

今後の行事予定

【備後古城記を読む】
日時　二月十五日（土）
午後七時より
場所　中央公民館
会費　資料代百円程度

【古墳講座】
日時　三月一日（土）
午後二時より
場所　中央公民館
会費　資料代百円程度

【古事記を読む】
日時　三月八日（土）
午後二時より
場所　中央公民館
会費　資料代百円程度

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

編集後記

皆さん、明けましておめでとうございます。今年も宜しく、お願いします。

昨年の十一月から会報の編集を担当して三本目の編集を無事おえることができました。原稿をお寄せ頂いた方々にお礼申しあげます。

最近、鎌倉・室町期の土地所有制度に興味を持ち勉強していますが、「職」（しき）と言う言葉に悩まされ続けています。何方か詳しい解説書をご存知の方がいらしたら教えて下さい。

次号の編集は久しぶりに「磐座亭主人」さんが担当されます。今年の私の編集担当は、六月・十月の会報です。また、原稿を宜しくお願いします。特に編集者の個人的好みですが、備後の国人に関して興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら原稿をお寄せください。宜しく、お願いします。

※城郭研究部会からのお知らせ

城郭研究部会では、今年度数回の中世城跡の略測を予定しています。第一回として芦田町の湯舟城跡の略測を左記の要領で実施致します。

《実施要領》
○日程　三月九日（日）
時間　午前八時三〇分
集合場所　福山駅南口釣人像前
○申込　出内城郭部会長まで
電話　五五―〇五三五

備陽史探訪の会事務局〒七二〇
福山市多治米町五―十九―八
☎〇八四九（五三）六一五七